

氏名	王子成		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第221号		
学位授与の日付	2018年3月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文の題目	明代晩期における水神小説の研究 —長江の水神物語から水神小説への発展の歴史と作品分析を中心として—		
論文審査委員	主査	神奈川大学 教授	鈴木 陽一
	副査	神奈川大学 名誉教授	山口 建治
	副査	神奈川大学 教授	廣田 律子
	副査	神奈川大学 教授	孫 安石
	副査	神奈川大学 准教授	中村 みどり
	副査	神奈川大学 助教	松浦 智子
	副査	東京大学 教授	大木 康

## 【論文内容の要旨】

本論文は以下のように構成される。

序章

第一章 先行研究と問題意識

第二章 白蛇の物語の変遷或いは発展と、明末における水神小説の成立

第三章 『旌陽宮鐵樹鎮妖』の分析

第四章 『全像顯法降蛇海遊記傳』の分析

第五章 『天妃娘媽傳』の分析

終章

論者は明末の短編小説集『警世通言』に収められた『旌陽宮鐵樹鎮妖』（以下『鐵樹記』と略す）を軸に、水神の物語を中心とする数編の短篇小説をとりあげ、これを文学史の視点から、また地域文化と文学作品との関係という視点から、更には、作品の社会的、政治的背景という角度から分析を試みたものである。

序章から第一章、第二章は、先行研究を踏まえながら、水神小説を文学史の角度から論じつつ、本論文の検討対象について、どのような問題意識で分析を行うかを論じている。まず論者はアジア稲作地帯においては水神信仰が普遍的なものであり、これを主題とする物語が古代から語られ、記録されてきたことを述べた後、「伝奇」という文言の短編小説が登場した唐代から北宋と、南宋から元明期にかけて戯曲芸能との相互の影響という二つの段階で、水神の物語が発展、変化を遂げ、豊かな物語内容と言説とを獲得してきたことを述べる。そして、明代の後半において水神の物語が、小説と呼ぶに相応しい作品になったとする。論者は、この過程を、六朝の志怪、唐代の伝奇、南宋の『夷堅志』、明代の『六十家小説』に見える水神を主人公とする物語を紹介しながら論じている。

第三章で、『鐵樹記』をとりあげ、江西を舞台として洪水を起こす妖怪を鎮める物語のプロットと、この背景となる江西の地域文化、更には主人公たる許遜を神とし、その信仰を広める役割を担った江西の商人集団について、具体的に分析を行っている。これが第四章以下の議論の前提を構成している。

また、第三章の後半で、本来六朝時代の物語であるこの作品に、皇族の反乱とこれと闘った王陽明の史実がそれと分かるよう使われており、当時の社会状況に対する批判、風刺を意図していた可能性があることを指摘している。

第四章では福建で刊行された『全像顯法降蛇海遊記傳』（以下『海遊記』と略す）を分析の対象とし、まず初めに先行研究を踏まえつつ、この作品の編者が江西出身の文人呉還初である可能性が高いことを述べる、さらに、物語内容の分析を進める中で、『鐵樹記』の主人公許遜が『海遊記』にも登場するが、福建文化の影響の下、異なったキャラクターとして描かれていることを明らかにし、二つの文化の交流の証左としている。この他、二つの物語における聖地の共通性、江西の地方劇と福建の宗教演劇の音楽の共通性、蛇神を恐れ或いは崇拝するという信仰の共通性を検討し、江西と福建の水神の物語とはその基底でつながっており、その相互関係に基づく交流が『海遊記』という短編小説を生み出す母体となったと述べている。

次に同じく福建で刊行された、『天妃娘媽傳』（以下『娘媽傳』と言う）を分析の対象とする。この作品は明らかに江西の文人呉還初の手になるもので、背景に江西の文人が福建に赴き、書物の出版に深く関わったことを示す。さらに論者は先行研究を踏まえ、『娘媽傳』は浙江永嘉県との関わりが深いこと、また『娘媽傳』の中に登場する白蛇の精は、『海遊記』において退治され、観音によって一死を免れた白蛇の精に他ならず、しかもその精を鎮めた廟は江西を流れる長江のほとりに設定されていることを明らかにした。これらのことから、『娘媽傳』もまた、江西と福建、さらには浙江南部の文化が複合的に関わっている作品であると論じている。

『娘媽傳』では、妖怪が暴れ回った結果大きな被害が出た様子が描写されているが、これについて、論者はこれまでに全く考えてこられなかった問題を第四章の2に指摘している。それは、この時期に中国の南方、福建と海南島に大地震が起き、津波が発生したということと、物語の中の妖怪の破壊とが呼応しているのではないかという点である。

本論文の特に重要な論点は、水神を主人公とする短編小説が、一方で民間信仰など地域の文化と深い関わりを持っていること、またその一方で、当時の社会状況と密接に結びつき、時に政治風刺を行い、時に天災の被害をも小説に盛り込んだと考えることにある。さらに、特に江西と福建の間で、人と文化との深く広い交流があり、これが物語を生み出す大きな力となっていること、個々の人物の形象や、ストーリー、プロット、作品の舞台などに両地域の文化交流が大きな役割を果たしていることが特に強調されている。なお、論者はこれらのことを論ずるにあたって、恣意的な記述を避けるため、作品の成立過程、特に出版の時期について、先行研究を踏まえた上で十分な考証を積み重ねていることを付記しておく。

## 【論文審査の結果の要旨】

本論文は、小説史という時間軸と、江西、福建などの地域文化という空間軸によって、明末の水神をテーマとする小説を分析するというもので、その構想は極めて大きなものであり、こうした課題に取り組んだことをまずは評価したい。

水神の物語について、小説史の角度からの記述にはやや安易なところ、用語の定義についてやや

曖昧なところ、論が先走り立証が不十分なところがあるが、全体の議論に疑義を抱かせるようなものではなく、志怪に見える水神の物語から小説に至る経緯について、概ね妥当な立論を積み重ねている。

『鐵樹記』と江西の文化の関係については、自ら修士論文で議論したことでもあり、全く問題はない。但し、『鐵樹記』と当時の社会背景、特に政治的状況とのつながりは、作品の執筆時期と公刊の時期のズレを考えると、指摘の可能性と重要性は理解できるが、もう少し慎重であるべきである。

『海遊記』とその編者、『鐵樹記』と『海遊記』との関係についての論証、特に江西と福建との相互関係についての論は創造性があり、一定の説得力がある。惜しむらくは、『海遊記』そのものについて、宗教演劇や民間芸能のテキストが大量にあるにもかかわらず、それらを十分にこなしていないため『海遊記』に関する詰め議論が十分ではない。しかし、江西と福建との地域間の交流は、近年大いに注目されており、吳還初が『海遊記』と『娘媽傳』の双方に関わっていた可能性が高いことの指摘と共に、地域間の文化交流という視点での物語分析は、先見性と独創性があると言えることができる。

『娘媽傳』においても、地域文化の相互関係に注目していること、またその中の描写と萬曆期に中国南部を襲った地震と津波の被害状況に関する記録との間に関連を見出したことは、本論文の独創であり、説得力も有している。特に、要旨のところでも述べたように、テキストの刊行時期についての考証を平行して行っていることが論の説得力を増している。

全体として、博士論文としての構想の大きさ、個々の章の論旨の組み立て方は概ね評価できる。個々の表現において、やや不明瞭な部分が散見するが、全体の論旨に問題を引きおこすようなものではない。

先行研究への目配り、資料の引用についても、先に述べた『海遊記』に関する民間芸能関係のテキストへの目配りが不足しているという一点を除き、大過はない。

以上の点を勘案し、本論文が博士学位論文に相応しいものであることを認めるものである。

なお、論者は小説のみならずその周辺の様々な民間芸能に深い関心を寄せていることが本論文で繰り返し強調されている。なればこそ、今後小説の周辺の様々な作品を広く研究し、今回の論文を通じて自ら定めた方向に向かって進んでいくことを期待する。